

愛宕松男著

契丹古代史の研究

勝藤 猛

著者愛宕氏は東北大学文学部教授。昭和十年京大史学科卒業以来、北方民族、特に蒙古史・元朝史の研究に従事せられ、その間多くの貴重な業績をもつて学界に貢献しておられる。そしてこの二、三年間は、十世紀はじめから約二百年間、華北滿洲蒙古にまたがる征服

國家遼帝國を建てたキタイ(Khitai、契丹)部族に対して、歴史学的・社会学的・言語学的立場から、深く且つ鋭い考察を加えて、いくつかの論文として発表されたが、このたびそれら論文の上に更に豊富な続篇を加え、東洋史研究叢刊の一つとして集大成されたものが本書である。

この書の「はしがき」によれば、ウラジミルツォフの遺稿が外務省調査部の訳により『蒙古社会制度史』と題して出版されたのは、昭和十二年のことであつた。この遺稿の出現は、アジア北方遊牧民族史の研究を大きく前進せしめた。即ちそれによつて、真に社会史の名に価する社会史を、モンゴル族について持ち得たのである。そしてそれ以後、滿洲・蒙古民族の部族制への関心が、我が国の滿蒙史学界の中に高まつていった。

ところがウラジミルツォフのこの書は、主眼点を遊牧の封建制度にしほつている。そしてこの封建社会を導き出す前時代としての氏

族制社会は、彼の関心にも拘らず、史料の制約によつて、副次的に扱われるにすぎなかつた。著者愛宕氏はモンゴル社会史のこの空白を埋めるべく、チングス・ハーン・モンゴル部の先輩で、且つ同一種族の代表であるところのキタイ部の研究に着手したのである。そしてそのための史料には、幸いにして恵まれていた。即ち『遼史』の宮衛志という、中国歴代正史の中にあつてユニークな篇目の中に、國家(遼王朝)以前の部族制時代の伝承が載せられてあり、また、『魏書』より以下の正史には、その部族結成に更に先行する永い氏族制時代の消息が見られるのである。

この研究の結果として、まず左の二篇が発表された。

契丹 Kitai 部族制の研究

『東北大学文学部研究年報』三(昭二七)

キタイ氏族制の起源とトーテムズム

『史林』三八一六(昭三〇)

本書の第一篇「キタイ共同社会の静態的構図」が前者に、第二篇「キタイ氏族制の起源とトーテムズム」が後者に、それぞれ当る。そして「古代キタイ社会の歴史的考察」を新しく加えて第三篇とし、社会制度の歴史的発展を論述するのである。

またキタイ語に対する著者の研究は、先に

契丹 Kitai 文字魚符・王蓋・銅鏡・銘文の解説

『文化』二〇一六(昭三一)

契丹 Kitai 文字の解説について

『東北大学文学部研究年報』七(昭三一)

などに発表され、著者の鋭い語学的探求は、本書の中の「キタイ語

原考」などによく表われている。

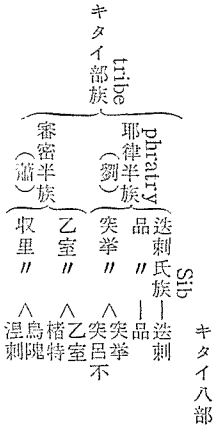
以下、各篇ごとに本書を紹介することにしよう。

第一篇 キタイ共同社会の静態的構図

近代のキタイ族社会の重要な特徴は、この社会にただ二つの姓——耶律と蕭と——だけが存在したということである。

遼之共国任事。耶律・蕭二族而已（遼史）。ところで「耶律」とはキタイ固有の姓であるのに反し、「蕭」とは中国風の姓である。

著者はこのことに疑問を抱き、その解明に向かう。そして「蕭」姓のキタイ姓は「審密」であり、「耶律」姓は中国姓「劉」であることを、『遼史』の中から見出し、指摘する。そしてこれらがキタイ部族の主軸たるべきフラトリー（phratry 半族）の残滓であることを確認する。このことを著者は、大ざっぱには、皇族が耶律姓であるのに対して、后族が蕭姓であるという事実でもって証明し、より詳細には、『遼史』を材料としてキタイ人の親族組織を考え、それによつてその婚姻形態をとらえようとする。そして耶律・蕭二姓の間の族外婚 exogamy を指摘する。著者は更にいわゆる「八部キタイ」と上記二姓の關係に進んで、鮮かに解明を加え、結局、キタイ部族制を次のように図式化する。



第二篇 キタイ氏族制の起源とトーテムズム

トーテムズム Totemism は原始社会には普遍に存在したという説——バハオーフェン、モルガン、ラボック、デュルケムたち——に對しては、史実の裏附のない仮設にすぎないという批判がなされている。しかも批判者の立場にあるシュニット、フレージャーたちの主張によれば、東北アジアの諸種族にトーテムズムは存在しなかつたと考えられてしまふのである。著者はここで、東北アジア遊牧民の系列に属するところのキタイ部族について、トーテムズムの存在を立証しようとする。まず著者は、キタイ族周辺の諸民族——突厥・高車・吐蕃・さらに日本——におけるトーテムズムの可能性を主張する。しかる後に問題のキタイ部族におけるそれを論証するに當つて、著者は周到にもフレージャー、ゴールデンワイザ、デュルケム、ハートランドらの定義を総合して、トーテムズム存在のための五つの条件を挙げ、一つ一つ証明してゆく。その条件の一つとしての、「氏族もしくはこの血縁集団は、動物・植物・或は稀に日月星辰といった自然現象を以てするトーテム名を採つて集団の称呼とする」について、著者は、

{ Jala-ga 馬 → 耶律 Jala-jinet
 Sar-mut 牛 → 審密 Sian-miet }

というつながりを見出す。つまり耶律姓とは馬フラトリーを、審密姓とは牛フラトリーをそれぞれ本義とするフラトリー・トーテムズムであることを立証したわけである。

第三篇 古代キタイ社会の歴史的考察

以上二篇によつて、先ずトーテム氏族に始まつたキタイ族が分裂

してフラトリーを構成し、ついで両フラトリーの合体による部族への進化に至る次第を抽象的に図式化した著者が、次には歴史学の本領を発揮すべく、キタイ部族制社会の変遷を發展的に把握しようとしたのが本篇である。文献によつて跡づけるキタイ族の黎明、即ち四世紀から、十世紀の遼帝國結成までの期間を、著者は三つに分する。

1 北朝期—古典氏族の時代

2 唐代前期—フラトリーの活躍時代

3 唐代中末期—部族結成の時代

以上やや舌足らずのような紹介をしたが、名工が一塊の木から芸術的な彫像をつくりだすように、漢字のぎつしりつまつた中国史料からかくも鮮かに靜的・動的な民族像をとらえて表現された著者のすぐれた知性に、ただ私は自分の理解力の不足を恥じるだけである。言語学・社会学、あるいは人類学など、歴史学の周辺の諸分野からの理解や批判は、本書の価値を更に高からしめるものであるとは思ふのであるが、それらは私の能力の外にあることである。学術書出版の困難な折、この名著を出版された愛宕氏のためにお慶びを申し上げて、筆をおく。

(A5判三二八頁 索引二四頁 東洋史研究会発行 定価九〇〇円)

マックス・ウェーバー原著
上原専祿・増田四郎監修
渡辺金一・弓削 達共訳

古代社会経済史

— 古代農業事情 —

浅 香 正

戦後わが国における社会経済史の發達に大きな影響を与えてきたものはマルクスとマックス・ウェーバーであつた。兩者共にひとしく近代資本主義あるいは近代資本主義社会の理解にその重点を置きながら、その立場に大きな相違のあることも既に周知のことである。しかるに少くとも古代史の領域に限定して考えると、マルクスの草稿『資本制生産に先行する諸形態』は既に邦訳され、一部の人々の間には過当の評価をすら受けているのに対し、ウェーバーの『古代農業事情』はその優れた内容にも拘らず、それ程充分な評価を受けずに今日にいたつたことは残念なことである。

勿論それにはかなりの理由もあるであらうが、ウェーバーの著書は概して内容の理解困難な点にあつたのではないかと考えられる。それにも拘らずこのたび渡辺・弓削両氏によつてウェーバーの力作の一つ「古代農業事情」が翻訳されたことはウェーバー個人の思想